



静脩

1992年2月

Vol. 28, No. 4

The Kyoto University Library Bulletin

情報と専門職員と

理学部動物学教室・生態学研究センター

川那部 浩 哉

昨年4月、京都大学に「生態学研究センター」が発足した。20年以上の長きにわたって、日本のみならず世界の生態学研究者が切望していたもの。従って当然ながら、全国、いや国際共同利用機関として機能すべく、運命づけられているものである。

共同研究とは何々か。さまざまな利用形態が存在するものの、その一部に、広い意味での情報の収集・保存・検索・提供のあること、言うまでもない。だが、口に言うのと実際に行うのとは、話が全く異なるものであること、これまたあたりまえ。すなわち、実際に何をやるべきなのか、また何が可能なのか、それが問題である。

場所がない。人がない。金がない。時間がない。これまたこの国の現状では、当然すぎていまさら言う気も起こらない。だが、ないないづくしだから考えもしないと言うのも、あまりにも締まらない。そこで突如として、「壮大なこと」を「夢想」する。

*

29年前の話である。ドイツのマックス・プランク研究所群のうち、国の北端に近いブレーン湖畔

にある陸水学研究所に、初めて遊びに行った時のことだ。当時6部門、18人ばかりの上級研究者がいたこの研究所、その図書館は、壮烈なまでに見事だった。陸水学の創始者の一人、アウグスト＝ティーネマンさん以来の「伝統の力」と言ってしまうとそれまでながら、雑誌・単行本はまさに圧倒的な量。かなりの時間をここで費やした。

図書に広く関心のある、へんな日本人研究者が来たというので、司書氏が数人寄ってきた。現在の日本の陸水学の全体的様相について、根掘り葉掘り聞いたうえに、日本の雑誌の名まえの変遷過程だの、日本語で書いてある奥付の内容だのについて、所蔵の雑誌や単行本を机のうえに持ち出し、積み上げての質問責めが続いた。最近日本の雑誌の名まえの、「ジャーナル＝オブ＝カレッジ＝オブ＝なんとか」から「ユニバーシティ＝オブ＝なんとか」になるのが多いが、単科大学のままであることは明白なのに、総合大学なる名に変わるの何故か、などと言う質問には適当に答えたものの、どれだけの雑誌を購入すれば、日本陸水学の全体的様相を偏らずに理解することが可能かとの質問などには、せいぜいが陸水生物学とその関

連分野の程度にしか、まともには、すなわち体系的には勉強していない身には、まさにしどろもどろも良いところだった。翌日メモを書きつけてあらためて話し、とりあえずの責めは果たしたものの、それから17年のちに日本で国際陸水学会議があり、そのとき『近年の日本の陸水学研究』なる英文出版物が共同作業で書かれるまでずっと、気にかかっていたものである。

だが私にとっては、日本の陸水学の全体的様相を詳しく聞き出そうとしたのが図書館の司書の人たちであったこと、これ自体が新鮮な驚きだった。そこで当人たちにも、また各部門の何人かの研究者たちにも、逆にいろいろ尋ねてみたのである。

答えはこうであった。

例えば、当時の動物部門はほとんど、水棲昆虫とくにカワゲラ研究者のみから構成され、その主な調査地域は南アメリカであった。このひとびとが図書館に入れる本は、どうしても自分の関心のある部分に限られる。しかし、期限が来てこの連中がやめたり移ったりしたあと、次に動物部門にどういう研究者群が来るかは、当然ながら予測できない。いや、おそらく、今と異なる材料と問題に関心をもつひとびとの占める可能性がうんと高い。

そのときに、何も困ることが起こらないように、雑誌や単行本を収集しておくのは、司書の当然の役目である。いや、各地の大学や研究所の連中が、陸水学に関する珍しい文献を必要とするとき、それを提供すべくつねに用意しておくのは、司書のあたりまえの役目である。日本語でしか書かれていないものでも、優れたものはいつの日か読む人のある可能性があるから、それも出来るだけ選んでおきたい。しかもそのうえに、つまらぬ雑誌や単行本を買わない、書棚をくだらない本で詰めないことも、これまた司書の役目である。そして、これらを見事に行うことが司書の業績である。これが一致した意見であった。

とくに若い司書や研究者たちは、いまさらあたりまえのことを、何で尋ねるのかと言わんばかりだったのである。

研究者が教科書はもちろん、総説を書くにあた

っても少し広い分野にまたがるときには、司書に相談し助言を仰ぐのはごくあたりまえのことだと、教授連からも聞いた。そして、この人たちのほとんどは、司書の資格はもちろんながら、陸水学の何かの研究で博士の学位をとり、むしろ学の全体像に興味があるために、この職についているのだということも、あらためて知った。

ここ数年、プレーンには行っていない。ただ3年前にミュンヘンで国際陸水学会議があったとき、雑誌や単行本といった従来の図書などのほかに、もっと生の、いわゆる情報についても、同じことが同様に行われ始めているとの話を聞いている。

*

ロンドンにある大英自然史博物館の、標本庫を最初に見学したのもこのときだが、そこへ潜り込んだと言える始めは15年前である。オーストラリアとニュージーランドにのみ分布し、すでに絶滅かと疑われていたプロトクロテス属の魚、私はこれを名付けてミナミアユと称しているのだが、その標本を全部、「調べた」とはとても言えない、ただひとつとおり見た。

前もって申し込んでおいたところ、坐るべき机が用意され、そのうえに2台の顕微鏡と解剖道具など一式、それに標本瓶がずらりと並んで、私を待っていた。1910年代採集の古いものがほとんどで、しばらく塩漬にしておいたとおぼしきものまで混じっている、まことに貴重な標本。それはともかく、外来者へのその提供ぶりは見事だった。「調べ終わった標本は隣の机に移すだけのこと。また、どの部分の数を計測し、どこの長さを測定するのかが決まれば、直ちにそれを行うから指示するように。」魚類部の技官の人は、こう言って立ち去った。

残念ながらのちに、この大英自然史博物館には人員削減があった。知人の研究者も何人かここを去ったが、技官の削減率はさらに大きかったと聞く。私は残った研究者に、「同じことなら貴君のような研究者がみな首になっても、技官の人たちは残しておくべきだったのに。そうすれば少なくとも僕には博物館が使える。研究者はどこかで補充できても、標本は破壊されればその補充はでき

ないのだから」と、あるところで話した。相手は真意を理解し、苦笑しながらもこの意見を是としてくれたこと、もちろんである。

この、まさに専門職としての技官群の存在こそが、あの国の生物学研究、いや広く科学研究をほんとうに独創的なものとして進めるのを支えて来たこと、言うまでもない。

*

生態学研究センターは、何よりもとは言わないまでも、こういう本格的な専門職員を、少なくと

も共同利用機関として、絶対に必要とする。だがこれを、「壮大なこと」と言い、「夢想」と言うのは、実は誤りではあるまいか。1年前から私は、「次の概算要求では、教官を振り替えて専門職員を取ることにしよう」などと口走って、一部から顰蹙を買っているようだが、ほんとうのところはどうか。

昨年12月末日期限のこの原稿、じつは年が明けてから書いている。いっぱい機嫌の初夢に過ぎぬと人は見るか。まあとにかく、支離滅裂なところは正月に免じて、許して頂きたい。

附属図書館所蔵図書21点が貴重書に認定される

「京都大学附属図書館貴重書指定等審査委員会」(平成3年10月24日開催)において審議し決定された貴重書について、貴重書指定の手続きが完了しましたのでお知らせします。



今昔物語集(鈴鹿本) 鎌倉中期

申請第7号 今昔物語集(鈴鹿本) 鎌倉中期
卷二、五、七、九、十、十二、
十七、二十七、二十九
今昔物語集の現存最古の写本、
線装本、桐箱入り

9冊

申請第8号 明史藝文志抄本 雍正初頃
一～八
黄虞稷の「明史藝文志」稿の伝写
本、線装本、朱筆による書込みあり
25cm. 8冊